

## 戦後マイノリティ研究と

## 西成情報アーカイブ

吉村智博

(近代都市下層社会研究者)

戦後史に関わる文献(講座、シリーズ、単行本など)の並んだ自宅の本棚に目をやっていると、やはりここ数年の業績や成果が際立っていることに気づく。かつて戦後五〇年を記念して一九九五年に刊行された中村政則ほか編『戦後日本・占領と戦後改革』(全六巻、岩波書店)など当時精力的に読み込んだ作品は本棚の隅の方に追いやられてしまっていて、テーマとしては社会、生活、地域など、時期としては高度経済成長を銘打つたものが前面に出てきており、研究の深化をあらためて感じる(もちろん強烈な主観なのだが…)。

なかでも近年の歴史認識と歴史叙述のあり方に大きな影響を与えているのは、①成田龍一ほか編『戦後日本スタディーズ』(全三巻、紀伊國屋書店、二〇〇八〜〇九)、②大門正克ほか編『高度成長の時代』(全三巻、大月書店、二〇一〇〜一一)、③安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史』(全四巻、岩波書店、二〇一二〜一三)の三シリーズであろう。①は、「戦争前夜とも言えるいま、あらためて「戦後日本」を総体として捉え直し、一つひとつの事実を、二一世紀の視点から歴史化する営みが、これから生き抜くうえで不可欠」(「はじめに」)な態度であるとの認識から、戦後日本を二〇年ごとに時期区分(四〇・五〇年代、六〇・七〇年代、八〇・九〇年代)し、思想、文化、教育、運動など多角的な視座から照射しようとしている。②は、高度成長の時代の歴史的特質を段階的に把握すること、成長と冷戦を「地域の側から問い直すこと、成長と冷戦を「暮らしと思想」の側から問い直すことを目的に「複数の視点や動態的な変化を把握する視点が不可欠」(「シリーズ「高度成長の時代」刊行にあたって」)との認識から当該期を描き出そうとする試みである。③は、戦後日本がかかえてきた「分断と画一化へ導く強

い力」と「人びとのつながりを結び直し、回復しようとするさまざまな試み」の双方に焦点をあて「戦後日本の多層にわたる問題を考えること」(「刊行にあたって」)を目指して編集された。いずれも多彩な執筆陣を配し、多様な論点を提示しており、あらためて歴史学、社会学、教育学、政治学、経済学の各分野において深化した方法論による相互領域への浸潤と、私たちが生きる同時代がまさに研究対象となりうることに刮目させられる。もとより、「戦後日本の歴史的研究を共通の基盤とする新たな知の集団」(「設立趣意書」)として同時代史学会が設立されたのは二〇〇三年であるし、「戦後」そのものを言説化してきた国民国家のナショナルヒストリーを相対化した西川祐子編『戦後という地政学』が「歴史の描き方②」としてそのシリーズの一冊に加えられたのが二〇〇六年。国立歴史民俗博物館が総合展示第六室「現代」の開室に先立って、公開フォーラム「高度経済成長と生活変化」を開催したのは二〇〇九年のことであるから、すでに戦後史、いな同時代史は、私たちの研究対象として定着しているといえるだろう。

ただ、こうした傾向にたいしてやや批判的な視点でみるならば、いずれのシリーズもマイノリティの視点からするアプローチが弱いといったことが指摘できよう。②の第三巻「成長と冷戦への問い」において、スラム、沖縄、女性が対象とされ、③の第四巻「社会の境界を生きる人びと」において、在日コリアン、沖縄人、被差別部落民、被爆者の運動や生活が取り上げられてはいるものの、マイノリティ研究の蓄積からすると、テーマに少しばかり偏りがみられるように思う。とくに物足りなさを感じたのが、私自身も研究対象としている日雇い労働者であり、彼/彼女を取り巻く問題については、単独の論放が一編も用意されていなかった。こうした研究動向への個人的な不満と、多くの研究者の間で共有されるべき今後の研究課題に、おそらく多大な貢献をするであろうプロジェクトが大阪市西成区で始動した。「西成情報アーカイブ」事業がそれである。アーカイブと称しているが、ミュージアム機能やライブラリー機能も併設していて、日雇い労働者の戦後史のみならず、大都市大阪の地域史の深化に不可欠の要素を兼ね備えている。

そこで、この事業の特徴と具体的な内容を紹介しておきたい。

## ◇

この事業の最大の特徴は、なんといっても西成区、とくに日雇い労働者街である釜ヶ崎にかかわる豊富な実物資料を収蔵しているということである。なかでも松繁逸夫氏の旧蔵資料は質量ともに群を抜いている。すでに目録化されデジタル化されている資料だけでも三千点あまり、そのほかのものを入れて、ざっと数千点はくだらない。松繁氏が長年、運動に直接かかわる中で見出し、あるいは多忙な労働の合間をぬって集めつづけてきた、まさに戦後の釜ヶ崎、いな大阪における戦後労働運動の貴重な側面を知ることができる一級資料にほかならない。

その一つが『大阪城』と題した日刊紙（大衆ビラ）。全日本港湾労働組合関西地方本部建設支部西成分会（全港湾西成分会）が一九六九年五月二五日に第一号を発行して以来、日曜、祝日をのぞいて毎日配布しつづけたもので、二〇〇一年六月一九日には一月号を突破している。一九六九年といえば、高度経済成長の真ただななか、翌七〇年には大阪で万国博覧会が開

催されるということもあり、釜ヶ崎には全国各地から多くの労働者が集結し、昼夜の仕事にいそしんでいた時期である。『大阪城』はそんななか、労働者に必要な情報を届けるため、釜ヶ崎の全体的な状況、労働福祉センターの問題、集会や職業訓練などのお知らせ、政治・社会評論、組合の主張など、わかりやすい文章と表現の記事を満載している。そのほとんど全部がファイルにとじられた形で残されている。まさに一九六〇〜七〇年代以降の日雇い労働者をめぐる日常的な問題を知るうえで格好の資料である。このほか、釜ヶ崎日雇労働組合（全国日雇労働組合協議会釜ヶ崎支部）が発行した、やはり日刊の『釜ヶ崎解放』も一部に欠号はあるものの、ほとんど揃って収蔵されている。また、メーデーや毎年おこなわれている越冬闘争や夏祭りに関する資料も見逃せない。運動面だけではなく、文化的な側面にも注目される必要があるが、その代表的な存在が労働者による労働者のための雑誌として一九七四年に創刊され、八五年の三八号まで刊行された『労務者渡世』である。労働者を対象にして釜ヶ崎内の五か所の委託店舗で一部一〇〇円で販売されていた文芸誌で、

特集としては「うた」「ふる」「しごと」「めし」「酒」など労働者の日常を取り巻くテーマを多く扱った。あわせて労働者から寄稿された俳句や短歌を掲載するなど労働者自身の表現の場でもあり続けた。この文芸誌のタイトルとして使われている「労務者」という表現は、日雇い労働者を労働者一般から排除するような差別的な表現として六〇年代ごろから世間で使われ始めた用語である。しかし、その刻印を逆手にとつてむしろ積極的に使用することで自らの誇りと主張を強く押し出していることは、作り手のひとりである寺島珠雄の言葉からも容易に察しがつく。また、『釜ヶ崎夜間学校ニュース』は一九八〇年五月に発足した釜ヶ崎夜間学校が週一回配布したニュースであるが、「学校」と称していても、そこは教えられ教えるという関係ではなく、みんなが対等の立場で参加することが可能となる場の創造を目指していたことを文面の端々から読み取ることができる。

デジタルデータ化が予定されている。こうした豊富な資料の展示公開を主眼として、第一回企画展「絵図・地図でめぐる西成」を開催し、江戸時代から一九二〇年代までのおよそ一〇〇年間を、おもな絵図（古地図）や地図（実測図、市販図など）でたどっている（展示内容の一部は近くホームページで公開する予定をしている）。「天保国絵図」（国立公文書館所蔵）や「大阪市パノラマ図」（複製）など、実に多様な絵図、地図の数々にとりどころ文字などの加工を施し、西成区がどのような変遷をたどってきたかを大きなスケールで読み取れる展示である。そして、西成情報アーカイブのもう一つの特徴は、西成や釜ヶ崎に関する図書を可能な限り収集し、閲覧できるようにしていることである。二〇〇冊弱の本はもちろんだが、名ものも含んでいるが、「西成」「釜ヶ崎」関連だけでも、「これだけあるんやなあ」と、準備段階からすでに多くの人を感心させ、興味を引いている。全港湾大阪港支部の執行委員をながく務めた故・平井正治氏の大著『無縁声々』（藤原書店、一九九七）はもちろんだが、戦後教育界民となっていた釜ヶ崎の子どもたちを

救済したあいらん学園のルポである小柳伸顕『教育以前』（田畑書店、一九七八）、漫画カマヤンシリーズ（ありむら潜さん原作）、近年の釜ヶ崎研究の到達点を示す原口剛ほか編『釜ヶ崎のススメ』（洛北出版、二〇一二）など、多彩な書籍を気軽に手に取ってみていただける環境を整備している。もちろん、釜ヶ崎だけではなく、西成区に関する歴史的書籍や大阪にまつわる文芸書、歴史書などの「顔触れ」は、専門図書館に匹敵する役割を十分に担えるであろう。



本年一〇月八日から、大阪市西成区にある大阪市社会福祉研修・情報センター（西成区出城二丁目）1階フロアーの一角で本格的に公開されている「西成情報アーカイブ」事業は、西成区から大阪市内大学地域連携センターが受託し、西成区の歴史的資料などの活用を目的に取り組んでいる。私は、七月からこの事業の非常勤研究補佐として着任し、大阪市立大学都市研究プラザの水内俊雄教授のもとで、資料整理と企画展示をつくりあげる準備のお手伝いをしている。西成区および大阪市立大学の多くの関係者の協力で、何とか西成区

の歴史を魅力あるものとして伝えることができるよう創意工夫をおこなっている。企画展示が成功しているかどうか、またアーカイブ機能やライブラリー機能が充実しているかどうかは、利用者や来館者の判断に委ねるほかはないのであるが、豊富な資料や多様な機能が存分に生かされたものとなっていると補佐ながら自負している次第である。

昨今、博物館・資料館（ミュージアム）、図書館（ライブラリー）、文書館（アーカイブ）は、それぞれの機能を活用しつつ、かつ相互に連携していく道を模索している。その活動は、それぞれの頭文字をとって「MLA連携」と一般的に言われている。「西成情報アーカイブ」事業もまた、そうした流れの中で活躍することが期待されているが、その道はまだ緒については、今後多くの方の協力と助言を必要としている。

私も大阪市立大学での共同研究「戦後大阪の都市部落の変容過程に関する総合的研究」（代表・野口道彦氏）などで一九五〇年代をとりあげた研究に取り組んでおり、戦後部落史研究と平行して戦後の日雇い労働問題研究にも取り組んでいきたいと考えている。